



コミュニティの再生と 活性化のために

各地で、後継者不足によって地域が崩れてしまい、人々が孤立する事例が多発しています。孤独を愛する人はいますが、孤立は自分がこの社会に位置づいているという実感を奪い、生きる喜びを失わせてしまいます。

その背後には、少子高齢化による若者減少、定年退職後の地域デビューの難しさ、価値観の多様化と人付き合いへの嫌悪、定年延長による全戸高齢者の不在など、様々な理由が挙げられます。しかし、さらにその裏には「家」の解体があるのではないのでしょうか。

日本は明治以降、国をつくる過程で、小学校を全国につくり、その学区を行政区と画定して、人々を組織してきました。現在でも、人々が意識する地域社会とは、基本的に小学校区で、それが町内会の範囲であり、そこに子ども会、PTAや老人クラブが重ねられていて、さらには少し前までは青年団や婦人会（女性会）、消防団が組織されていたのではないのでしょうか。神社も統廃合されて、小学校区が一つの氏子区と

なっていて一つの神社が置かれ、その他は分社になっているはずで、日本の地域社会は、地縁団体として組織され、そこに人々が家単位で加入することでつくられてきました。ですから、一戸一票制で、基本的には家長が代表して、慣例にもとづいて運営されてきたのです。

しかし、近年この150年続いた団体としての地域社会に大きな試練がもたらされています。「家」が激変しているのです。高齢世帯や独居・単身世帯が増え、また一人親世帯、さらにはLGBTの人たちの世帯など、家族の形態が多様化して、人々の価値観も急速に変わりつつあります。

家の変化は、それを基盤としている地縁団体を動揺させ、その結果、地域社会が壊れていきます。初めのうちは、何とかしなければ、とがんばっているのですが、その責任感も、だんだんと負担感に変わり、最後にはもうダメだと投げ出してしまって、行政にお願い、と依存することになってしまいます。

地域社会が急速に解体するのは、地元でがんばっ

ていた人たちが、もうダメだと諦めてしまったときです。それはまた、地元で生きる誇りを失ってしまったときだといえます。

そうすると、地域社会の自治機能が急激に衰えて、人々が孤立し、さらに地元で生きていることの喜びが失われてしまうようになります。

これまでの地域社会が歴史的につくられてきたのだとすれば、私たちは地域社会を新たにつくりかえることができるはずで、そこで重要になるのが、一人ひとりが、地元で暮らすことに喜びを感じ、自分たちがこの社会をつくっているのだと主人公意識を持つことです。

そのときには、地域社会は、家を基本とするものではなくて、一人ひとりが仲間とともに、サークルやグループをつくり、それが生活に潤いをもたらして、孤立から救われる、生きるに楽しい場所となっています。そこでは、子どもたちから「ありがとう」といわれ、一緒に何かやろうか、といえる関係がつけられていきます。それは子どもにとっても大事なことの

です。

こういう地域社会を、改めて「コミュニティ」と呼んでおきたいと思います。家中心で、団体によってつくられてきた地域社会ではなく、一人ひとりが楽しく、他の人と一緒に、自分たちで担っていると思えるコミュニティです。

こういうコミュニティが、各地で産声を上げ、新しい社会をつくる活動を始めています。そのとき大事なものは、よそのコミュニティのつくられ方に学びつつ、自分流にアレンジして、使いこなすことです。

この事例集は、そういう新しいコミュニティづくりのアイデアが、実践によって実現している姿を紹介しています。地域社会が壊れてしまったと嘆いているよりは、一人ひとりが主役になるようなコミュニティをたくさんつくって、問題が生まれなくなる地元をつくることにつなげませんか。その方が、きっと楽しい毎日を過ごすことになるのだと思います。



牧野 篤 東京大学大学院教育学研究科教授
名古屋大学助教授・教授を経て、2008年、東京大学大学院教育学研究科教授。2013年、東京大学高齢社会総合研究機構副機構長併任。中央教育審議会生涯学習分科会委員。